
略 妹様へ

斉藤さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

略 妹様へ

【Nコード】

N8515X

【作者名】

斉藤さん

【あらすじ】

王都で始まる御前試合、そこで家族と出会う男が居た。

本来であれば参加の権限すら与えられないはずの男は、本来呼ばれていた男を殺し、その場所に現れたのだ。

英雄の血脈と呼ばれた家族のなかで駄作と呼ばれていた長男。それは選ばれない男の挑戦だった。

序章 昔語りの嫉妬

ああ、待っていたよといつても、僕のことなんて誰も知らないだろうね。

実はルーベス辺境伯なんて呼ばれる一族の僕は長男という奴だったんだ。英雄の血統なんて国からは呼ばれ、国境付近で帝国と睨みあいなんかしている軍事拠点の領主、しかもその後継者。

で在った筈だった。

自分で言うのもなんだが、僕には才能があつた。凡百には劣らないだけの才能が、それもそのはずだ、剣聖と霸王なんて呼ばれた魔法使いの母から生まれたのだ。

その血は嘘をつかなかつたのか、恵まれた才能を手にして僕は生まれ、その二人に恥じないようにと頑張っていた。

だがそうやって頑張っていたはずの僕は、辺境伯の後継者としての地位を追われることになる。四つ下の妹の所為で。

妹は俗に言われる天才だった、いやあれは天才なんてもんじゃない、父と母を超えた化け物だ。

妹は生まれて始めて持った剣で、僕を打倒し、魔力においても僕を超越し、技術を持って僕を隔絶した。たった五歳の子供に九歳の僕は容易く負けたのだ。

結果として与えられたのは、両親からすら無能、そもそも妹は僕のことを比べる対象にすらしていない。

凄まじいピエロだったよ、こっちは必死に追いつこうと努力していたんだからさ。

かくして辺境伯の後継者であった僕は、この家一番の出廻らしとなった。

妹はあらゆる意味で優秀だ、笑顔一つで人を引き連れ、勉学さえも簡単に吸収し、いつの間にかその分野を習熟している。

結果として残ったのは、僕と妹の絶望的無さだ。何一つ僕は妹に勝てなかった、努力した、寝る間さえないほどに僕は努力しても、何一つ妹には敵う事は無かった。

そしてとうとう、両親さえ邪魔になったのか、違う家に養子に出される始末だ。

そして公爵家の後継者だったはずの僕は、その下、男爵家の養子となったわけだ。

その際に言われた言葉も傑作だ、駄作よアイシャさえ居なければお前は立派な後継者だった、なんて実の父親に言われたぐらいだ。流石に泣いた、ちなみに母親はただ薄く笑うだけで、何もいいやしない。この時流石に分かってしまった、当時まだ十二の僕だったが、自分はずいぶん前からのこの家に必要の無い存在だったと。

あの時は泣いたね、本当に泣いたさ、悔しくて、悔しくてさ、いやそれ以上に苦しくて、ひたすらに剣を振っていたよ。

長年やっていた習性だろうか、いや今になって分かるけど、努力って自分を裏切らないんだよ。たった一つ信用できたのが、あの時の自分には努力だって。

だいぶ正気じゃないよね。

けどさ、本当にあの当時信用できたのはそれだけだったんだ。それからさ、努力以外が信じられなくなってきたのは。

たださ、あの時実は一人だけ味方がいたんだよ。誰だと思う、誰だと思う、本当に笑えかぎりだとき、たった一人だけ俺を庇った奴が居るんだよ。

いや失礼、ちょっと荒くなっちゃったけど、お分かりかもしれないが妹だ。

あいつは能力はともかく精神はまだ餓鬼でさ、今考えてみればそれが付け入る好きだったのかもしれないけど、あの両親からずいぶん純白なものが生まれたと思うよ。

「お兄様、何でアイシヤを置いてどっかいつっちゃうの」

流石にその言葉を聞いたとき思ったさ、お前の所為だつて、お前が優れすぎていたからだつて、いやそれ以上に僕が無能だつたといふべきだろうか。

その時僕は何をしたと思う、傑作だよ、妹を殺そうとしたのさ。正直あの時は殺意しか無かつたよ。

けどさ、自分の今までの全てを混めて妹を殺そうとしたのさ。結果は最高だよ、笑えるぐらいに最高さ、妹はさ何事も無くよけて、俺の一撃で終了。

言った言葉も覚えてるさ、そんな不意打ちの訓練反則だよお兄様、だよ。努力しても届かない壁はさ、今でも覚えている僕の最高の攻撃を、はははは、訓練呼ばわりさ。

そしてあの当時の集大成を上回る一撃で気絶。

絶望すらわかなかつたさ、そのおかげで一つの決意が出来たけどさ。別に妹が悪いわけじゃないが、殺してやるつてさ、俺は妹を殺してやるつて、絶対に殺すつて、殺して、殺してやるつて。

あいつだけは絶対に殺すって、当時十二歳だったか、そんな子供はそれしか考えられなくてさ、それから十年たったけどさ。知ってるか今のあいつ、もはや人間じゃないさ。

一人で一国を落とすだって、もうあれは人間じゃない。

僕もだいたいぶって言うか、軍隊ぐらいならどうにかできるさ、麗しの父と母に感謝だよまったく。

だからさ今も悩むんだ、どうやったら妹を殺せるって、どう考えても一方的な虐殺しかされない、どうやったら妹を殺したらいいって。

あいつは僕よりもあらゆる意味で勝っている、知恵でも策でも何でもかんでも、あれだけ勝てる要素が無いんだ、勝っている部分は間違いなくこの卑屈な性格さ。

あとは性格の暗さ、根性が腐ったところか、さて君にお願いというのはさほど難しいことじゃないさ、あの軍神相手に暗殺しろなんていうほど僕も無粋じゃない。

あれを殺せる唯一つの機会、建国祭の御前試合の権利を譲れって事さ、僕が選ばれないのあの軍神の兄だからってだけ、君よりは弱くないのさ。

だが僕は軍神ほどには強くない、だからとりあえずよこせ、俺が軍神を殺せる機会を、といってももう終わりだろうけどね。

お前はとつくに死んでるんだ、そういうわけで死んでもらったんだ、僕は妹を殺したい、あいつを殺せば他はどうでもいい。

逆恨みも結構、殺したいほど妹を思っている兄だ。それぐらい許してくれてもいいだろう、命一つだ安くつくもんだ。

そしてごとりと地面に転がった体は、楽しみに血を噴出している

花火のようだった。

「王都御前試合出場権利もらったぞ、名前はなんだったか」

ここに一人の天才剣士の命が尽きた。

いつ剣を放ったかすら分からないその妙技に、もしかすると死体は歓喜していたかもしれない。

その男は何を突き詰め続けたのか、殺意という目標を消すことなく、どの境地まで突き詰めたのか。

死んだはずの死体はまだそこに意識があるかのように一言だけ叫んだ。それがきくと剣士の最後の意地であったのだろう、死んだ体から声が放たれる。

「見事」

流石に驚いた彼は死体であるはずのそれが叫んだのだ。流石に動揺したのか、死体から取り出した参加権利である短刀を地面に転がしてしまう。

何より自分に与えられた賞賛に、目を丸くしてしまう。

誰一人認められもしなかった、その妹という太陽に隠れた夜空の星に、歓喜の音が響いたのだ。

今までとは違う浮ついたはずの笑顔が消え、優しくほころんだ表情を見せたそれは自然と自分勝手に殺した死体に頭を下げた。

「父からは駄作と、母からは無関心を、妹からは敬愛を、尋常の勝負じゃなかったけれど名乗りぐらい加えるべきだったよ。妹以外考えてなかったからさ、男爵家は父の所為で潰れて家名はないが、センセイだよ僕の名前はセンセイだ」

それだけ言うと彼はきびすを返して目的地に向かう。
優れた剣士で、自分よりも素晴らしい人物だったのだろう、だが殺した、不意打ちで、本来なら自分と互角以上の人物だったのかも
しれないと。

だが殺した、心臓に棘が刺さったように胸が痛くなりながら、殺したと、何度も心に呟く。

そしてあの麗しの家族を殺すと、愛しい家族よと、待っていてくれ、きつと殺すと、必ず殺すと、それが、それだけが、彼にとっての愛情表現だ。

これより始まる王都御前試合、

軍神	アイシャ	不敗	ロード
剣聖	グランツウオード	惨敗	センセイ
霸王	レイリアール	王道	ラストール
無双	ザインザイツ	神童	ヒルメスカ

より始まる戦いは、王国史上最悪の結末を迎える。

死者五百三十五名、行方不明者千五百六十二名、重傷者三千五百名、軽傷者六千五百名、後に王国滅亡の遠因となる試合。

その始まりは剣聖の死亡からであった。

あとがき

才能があっても、もっとすごい才能に潰されるって興奮する。

序章 昔語りの嫉妬（後書き）

ただし気が向いたら。

一章 御前試合前夜

その日は王国の建国祭の始まりだった。

北方の軍神が一つの国を落としさらに国力をつけた国は、いつにもましてお祭りムードという奴だっただろう。

国民の喜ぶ声がやけに響いていた、そんな楽しげな空気の中、ひなくれた男はおいしそうに鳥のから揚げを頬張っていた。

軽く塩コシヨウで味付けされたそれは、出来立てと言う事もあり、噛めば肉汁が舌を焼くように溢れて来ている。それがさらに食欲をそりももう一口といった具合に手が伸びてしまうが、主題はそこじゃない。

御前試合に登場するはずだだった剣士の一人、魔剣と呼ばれた剣士が殺されたという情報がようやく王国の責任者の元に届いたのだ。そしてそんな天才を殺したのが、ある理由から没落してしまった男爵家の養子であり跡取りとなっていたセンセイという名の息子である言う話だ。没落して以来行方をくらませていたと言う事だったが、こうやって御前試合に現れ、魔剣を召集した貴族の面子を潰したのだから、上へ下へと大騒ぎだ。

だがその生まれを知っているものが、不用意に騒がれることを拒みそれを黙殺したののだが、結果として今国の上層部では少しばかり、暗い空気が流れていた。

そんな不穏な空気の中、一人だけ人物の名前を聞いたとき喜んだのが、軍神と呼ばれる少女であった。

「ねえ、お父様、お兄様が帰ってって本当なの」

花香る風をまとつて少女は飛び跳ねながら自分の倍は在ろうかという父の背中に飛び乗る。軽い跳躍ながらその重力を感じさせない動き一つ一つに、国を滅ぼしたという才能を片鱗を見せ付ける。

見た目どおりの頑強な体つきをして居る、剣聖は軽い衝撃を感じつつも、柔らかな愛娘の幼い行動をとがめるのを一瞬忘れてしまふ。どれだけ血に濡れても白いその心に、剣聖はひどく心が休まるのだ。

だが逆に駄作としか思っていない息子には、この大切な娘を近づけたくなかった。

傍から見ればあの息子は、嫉妬の塊で酷く汚らしく、娘の美しさが穢れるとしか思えなかった。

つねに下から妬み上げる様に、汚らしいその嫉妬の感情が、娘との対比でいつそう汚く写ってしまふ。

それは娘の才能が凄まじすぎた事と言うのもそうだろう。なまじ息子も間違はなく自分に並ぶほどの才を持っていたのも事実だった。だがいま自分の背中に、ぶら下がっている娘の為なら、あの程度の才は捨てられたのだ。一娘に牙を剥くか分からない才など不要でしかなかった。

「そうだな、あの馬鹿者が帰ってきた」

「お兄様、強くなったんだね。だって御前試合に出られるんだもん、弱かったお兄様が強くなったら、また一緒に暮らせるのかな」

楽しみに利いてくる娘の言葉に、父親としては酷く同情してしまふ部分もある。

本来であればあの息子にだって、天才という言葉が与えられてもおかしくは無かったのだ。ただ背中の真の天才が、いたからこそ彼は無能扱いされた。

彼を男爵家に養子に出したのも、そういう視線を避けようと父親なりの努力でもあった。九割は娘に対して危害を与えないようにではあるが、一割は実は父親の優しさではあったのだ。

最もその男爵家は父親である自分が没落させてしまったのだから、恨まれていても仕方が無いと思っっている。

しかしそれだけでここまでやるとは思っていなかった、出来るだけ早めに潰しておこうと、自分を最初の対戦相手にあてがったりと、娘を守る為に必死になっていた。

「そうだといいが、あいつには才能なんて無い。卑怯な手管でも使ったのだらう、そういう者は我が家に不要だ」

「えー」

必死になつて戦つて勝利してその権限を得たのかもしれないと言うのに、父親としてそれを認めることは無いのだらう。

認めてしまえば、あの視線が娘に刺さる。あの嫉妬しかない瞳が、彼の愛した娘を汚しかねないと、その天使を穢れさせるものかと牙を剥く。単純な話なのだ、彼は娘のほうが大切に息子はどうでもいい。

娘という魅力ではない、とうにその娘の純潔を奪つたような父親だ。

すでに女としてしか見ていないのだらう。それを奪われるというただの嫉妬だ、ましてや彼女は兄に対して無償の信頼を寄せている。それが酷く剣聖の嫉妬に火をつける、だからこそ男爵家は潰されたのだ。

この男は所詮は小人であつて、娘を女としか見ていなかった。いやそのあまりの穢れの無さに、魅了されたといったほうが外れでは

ないかも知れない。

だからこそその内に隠すべき感情があふれてしまう。
見苦しいまでの男の嫉妬、そうなのだ、この男もまた嫉妬という
それに気が狂っている。

きつと二人が会えば思うのだろう、流石は家族揃いも揃って、こ
とごとく破滅しているように似ていると、それは殺しあう理由にし
かならないが、これから一日たてば嫌でもそうなるのだ、ちょうど
いいタイミングの親子喧嘩だ。

同族嫌悪なんて人類の戦争の理由の筆頭だ、背中にぶら下がる娘
を胸に抱く。

「ほえ」

いきなりのことに驚いたのか、目を丸くして間抜けな声を上げる。
話すものかと男は心に誓った、妻などどうでもいいのだ。彼が大
切なのはこの娘だけ、自分よりもはるかに強い最強。

その彼女をとられることのみ恐怖するのだ。

父親に抱きしめられて少し顔を赤らめながらも、まだ夜じゃない
よと笑って頭をなでるその姿は、娼婦のようですらあるというのに、
穢れないその言葉は誰にでも股を開く麗しの聖女だろうか。

ただ知らない少女はそれすらも受け入れるだけだ、きつと彼はこ
ういう部分すら息子に見られたと思っているのだろう。

ああ憎いと、そう思い続けているのだろう。

偉大なる護国の剣聖は自分の娘に惚れて関係に及ぶだけじゃない。
息子に嫉妬して追い出した、醜い、自分はなんて醜いのだと、その
事実を消す為だけに息子を捨てたのだ。

そう汚いのはどちらだ、嫉妬に狂って妹を殺そうとする兄か、そ

れとも娘の体に溺れた父が、その二人はまるで鏡のようだ。

まったく同じの正反対、合わせ鏡にして同じような人間を大量生産したらどうだ。

勝手に自分達で殺しあってくれよう。同族嫌悪の吐き気のする集大成がこの二人とも言えるかもしれない。

この場で美しく綺麗なままなのは、父親を優しく抱きかかえながら、兄のことをただ慕い、父親を娼婦のように、聖女のように誘う、アイシャと言う軍神だけだ。

原因はすべての美しい少女という形をした軍神、だがその周りから湧き出るのは嫉妬ばかりだという、さて本当に汚いのはどちらなのだろうか？

だが彼女の兄なら言ってくれよう。

「全て」だと。

場面は流れるように代わり、食事が終わった彼は堂々と御前試合の参加賞を見せ付けて王城の参加者の部屋に寝転がっていた。

かなりの人間から奇異の視線で見られるが仕方の無いことだろう。何しろ北方の貴族にしか見られない灰色の髪だ。そんな髪をしているものは、軍神と剣聖ぐらい、だからだろう知っているものは驚いてしまう。

彼は一体誰なのかと、家名もないどこかの腕自慢、たぶん北方の蛮族の出なのだろうと推察されるぐらいだろうか。元々英雄の血統とはそちら側の血を引いている者達の中でも力の優れているものに与えられる名称だった。

それが彼より十六代前に、蛮族との融和政策があったり戦争があ

ったりしたときに活躍したのが、灰色狼と呼ばれる彼のご先祖様だった。

あまり王都の方では見ることは無く、大公である剣聖とその家族ぐらいというのがこの国では当たり前の考え方なのだ。灰色の髪は北方の貴族というのはそれぐらい常識的なことではあったが、流石にそれは無いと誰もが首を振る辺り。

剣聖の長男というのはよっぽど秘匿とされているのだろう。

だからこそ彼は余計に嫉妬に狂ってしまっ。

何で、何で妹だけと、溢れるからだの熱は、ただの妹への嫉妬だ。あの綺麗な妹に対する、自分の醜さを見せ付けるあの妹の所為だ。

あの妹は無垢だ、真っ白の何一つ汚れること無い白、だからこそ綺麗過ぎる。無垢は優しさではない、純粹は優しさではないのだ。

優しさと自分がそうされたいという欲望の反映。打算的な代物に過ぎない、自分が下からされる、金銭の取引となんら代わりは無い。だがそれでもそういったものが優しさでも、純粹無垢よりはましだ。

あれは綺麗なんじゃない、自分達が汚いことを見せ付けるのだ。だからこそ彼は憎いのだ、全てを持っていて、拳句に美しい。

感情が殺意のように荒れ狂う、これから始まるその戦いの為の原動力が、ただその身を焦がすような嫉妬が、軋む心を立ち直らせる。

「足掻くんだ、やっと機会が出来た、これっきりなんだ」

体中が震える、今から行うのは敵う筈の無い戦いだ。

だがそれで抗うことを止められない、男は足掻くしかない。体中を震わせながら、剣を握った。

そうして室内の中で軽く振り回す、たった一つ彼を裏切らなかつた努力の結晶だ。だがその全霊を尽くしても彼はきつと勝てない。

「これつきりなんだ」

絶対に、どれだけ力を尽くしても妹とでは才能の桁が違う。だが負けるつもりで彼はここにはいない、抗うのだ必死に彼はそれしか出来ないから。

嫉妬なんて本来悪い感情ではない、醜い訳でもない、当たり前なものだ。当然の代物なのだ、隠す隠さないはあつたとしても、それは運命に唾を吐くように当たり前前の行為。

ただその感情を扱う人が悪いだけに過ぎない。

それを彼は穢れだと思つてしまふ、綺麗なものを見続けたから、美しいそれを見続けたから、完全完璧を見てしまったから。

この世の穢れを受け持つたとしても言うように、彼はただ嫉妬で妹を殺す。

「この世に完全な物なんて無いって証明してやる」

絶対に負けるであろう今からの戦いを超えるために。

一章 御前試合前夜（後書き）

すでに狂った人間しか居ない気がする。

二章 白刃すらまだ遠く

酷く体が火照ってしまふ。それはきつと寝る前に軽く振るった剣が、まだ足りないかと騒いでいるかのようだった。

その剣のみだらな誘いに、自分の体から溢れる火照りを覚まそうと、侍女に話を聞いて訓練所に向かったセンセイだが、先客が居たのか、やけに騒がしい。

明日のためにと体を休めているものの法が本来なら多いはずと考えていたが、物好きはどこにでも居るようだ。

そんな風に考えて笑みをこぼした。

だがそんな物好き、普通ならいやしないということに彼は気付くべきだった。彼と同じくらいまともじゃない人物なんて、たった一人だけなのだ。

「やっぱり、お兄様だー」

妹、それぐらいなのだ、これからを考えれば、その程度が支障にならないものなんて、目の前の軍神ぐらいだ。間違いなくこの御前試合の勝者となる少女、油断があるうとただ勝利をつかむ化け物。

純粹無垢を極めたようなそれは、久しぶりに会う兄にまで、輝くような笑顔を見せる。

彼はその表情を見るたびに、劣等感に苛まれ、何も喋れなくなる。その対比にさらに彼は嫉妬心をあおられるというのに、彼女の笑顔には何一つかけりが無い。

だから自分が醜いと植え付けられる。

「お久しぶりですお兄様、アイシャは元気でした。お兄様はどうでした」

そして彼にささげる純粹な好意、打算すらないその信賴だけを固めたようなそれは、完全に彼が妹に抱く感情の反対であった。

なんとぶざまな様だろう、妹を殺すと息巻いて、この男が出来るのは、圧倒的なそれに何一つ出来ないのだ。見苦しく妹の美しさに嫉妬して、罵倒の声すら上げられない。完ぺきなそれは、彼という存在を居るだけで痛めつける。

「げ、っげん、元気だったよアイシャ、ひ、ひさ、ひさし、ぶりだね。お前に会いたくて、会いたくてさ」

殺したくてさ。

言えなかった、そういえばきつと妹は、悲壮な顔を彼に見せてくれるというのに、その太陽に陰りを入れる事だって可能だったはずなのに、そんな裏のあった筈の言葉に、光るように笑顔になる妹は、彼に抱きついてきた。

兄の優しい言葉に、子供のようにはしゃぎ様だ。

それが本来なら人を魅了する力になるのだろうが、その目の前の男には猛毒だ。なぜ違うと、なぜこんなに自分とこいつは違うんだと、泣き叫びそうになる。

同じ種と腹から生まれた二人のはずなのに、二人はあまりに対極過ぎた。優れた、いやはつきりというなら、その汚濁のような心と無垢な心、その差は一体どこにあったと。

認めてくれとって変わるようなものじゃない、彼女のうちから湧き出るその美しさと、自分の醜さの差は一体なんだと、何度叫んでも足りないほど彼は心で叫んだ。

戦うまでも無く心を折られたセンセイは、感情を振り乱し泣き叫ぶ、心が抉れても、笑顔のまま歯を食いしばる。

「アイシャも会いたかったんだよ。ただよく分からないけどお父様が会わせてくれなかったし、すごく寂しかったけれど、お兄様もそうだったんだよね」

「ああ、じゃなかったらあんなことしないさ」

ただ言葉に出来ないのだ、この妹の前だと、心では違うというのに、純粹無垢なそれを汚すなと頭が命令でもしているように、彼は何一ついえない。

ただ妹の言葉に喜ぶような言葉をオウム返しするだけ、それはきつと今まで刷り込まれた何かだ。

彼はうけたことがないのだ、ただ純粹な好意は、彼女以外では向けられたことすら少ない。

「傑作だよ」

ポツリと呟いた言葉に彼の全てが混じっている。

本当に自分は嫉妬だけだったと、そこにある太陽は、自分の影さえ埋める。もし彼に見方が居るのならきつとそれは妹なのだ。

彼の言葉に首を傾げて見せるが、ああなんて綺麗で綺麗なんだ。

優しく頭をなでてみるが、心には嫌悪感しかないというのに、顔は優しく笑っているようだ。これは呪いの様だ、何一つ自分の行動がうまくいかない、そんなのあたりまえだ、世界は彼女を中心に回っているようなものだ。

その辺の路傍の石が、自己を主張したところでその程度、汚濁はただ粛々とその太陽に焼かれて燃え尽きればいい。

「わかってたけど、お兄様も珍しいよね。普通はこんな時間に、しかも御前試合だっていうのに、訓練所なんて」

「気がはやって、少し剣でも振って心を落ち着かせようかってさ」
擬態である言葉遣いはもはや彼女の為だけにある。

父親を前にすればたやすく裏返るはずのそれは、一向に脱げる機械は無い。それどころかそれが当たり前にすら変わりそうであった。

「私はね、お兄様に会えそうだったからなんだ。だってお兄様はいつだって素振りばかりしてたから、絶対にここに来ると思って」

だからであった時はやっぱりだったのかと彼は思う。

あの頃から自分の根幹は何一つ変わらず、妹に読まれていることを再確認して、体が震えた。

多分だが彼はあまりに妹を神聖視しているのだろう、だからそ自分の行為を読まれるたびに、心が冷えて泣き叫びそうになる。だが彼は病的なまでに昔から、手に持っている剣を振り続けたのだ。

彼に近しく、その行為を見た人間ならある程度は予想がつくはずなのに。

そんな事実さえも見えなくなるほど、彼女に押しつぶされていた。

「それで、お兄様がどれだけ強くなったか、私が試してあげようと思っております」

訓練所にある当たり前の刃引きした剣、身長が低く小柄なアイシヤにとつては、それさえ体には余るはずなのだが、剣に羽でも生えたかのように、軽々しく扱っている。

彼はかつて見慣れた光景ながら、喉から呼吸の機能が失われた。心臓さえ動いているのか分からなかった、恐かったのだひたすらに、

それこそ今までの彼女に対して行った行為のすべてを超えて。

蛇に睨まれた蛙しかなかったのだ。

震える、ガタガタと体が震えて、何一つ殺意を向けられない。

なんと、なんと、なんとまあ。

そこには魔剣を殺した時の余裕すらもない。その威厳のかけらすらも見ることなく彼は心を折られている。震えるだけ、また容易く絶望させられる、だが震えながらも武器を手にすることだけはできた。

この努力に付き添った剣だけは、彼が彼を裏切っても裏切らなかつた。

だがそれまでだ、折れた心そのまま構えて武器を振るう。それが本来の彼の力を発揮させるはずも無い。

「駄目だよお兄様、そんな構えじゃ弱いままだから」

ぶるんと、ただ剣を一度振って、空気を裁断する。

あどけないはずのその一振りには、ただ彼と彼女の差を如実にあらわし、果てすら遠いそれをただまざまざと見せ付ける。

才能が無ければ、きっと彼は蛮勇で死ねた、なまじ中途半端に才があるからこそ、差を見切って絶望する。

何一つ彼にプラスになることはない。

「ちゃんとお兄様を見せてよ」

その恐怖の呪縛を断ち切る事すら出来ないまま、ただ呻き声を上

げるように理合いもなく彼は武器を振るった。それは妹に促されたから、呪縛じゃない呪いに縛られたままなのだ。

そんな攻撃は意味も無く容易く、彼女にはじき返される。

裏切らない剣を裏切った男は、地面に最愛を転がし、ただ音を残響させる。流石に兄のその姿に落胆したのか、明るい顔に陰りが出ているが、ようやく彼が望んだ表情だったのかもしれない。

ただ呆然と立ち尽くす彼は、何一ついえない。ただあまりにもぶざまな自分に嘆くだけだ。

「いじわる、秘密なんて家族にしちゃいけないんだよお兄様」

しかし言葉を返せるわけも無く、ただ響いた言葉が絶望に変わる。彼女はプラスのほうに考えたのだろうが、今の彼の全身全霊だった。心神喪失状態ではあったが、それでも恐怖に促された男の必死ではあったのだ。

もし立場が逆でもそうだったと言い切れても、じゃあお休みなさいと、訓練所から消える妹に、ただああと返して。

そこでようやく涙が溢れた。

「あれは、なんなんだよ俺」

なんなんだと、ただであっただけで心を折られ、無様を繰り広げただけ。

何一つ出来ずに、ただ怯えて自爆して剣を裏切った、裏切らないそれを自分が裏切ったのだ。

「口だけじゃないか、何一つ、何一つ」

殺したい妹のご機嫌伺いに、上っ面だけの家族の団欒。ただ妹の為だけに、自分は一体何をしているのかと、言っても届かない。

剣を拾い上げ、剣を振る、ただ涙を流して、妹に負けたあとはいつもこうだったと、それに意味が無いのかもしれないと思いつつながらも。

「何も出来なかった」

握る手が強くなる、だが彼はまだ何一つ変わっていない。

それを超えなければ彼に勝ち目などあるはずが無いのだ。刷り込まれた心さえも踏み越えなければ。

「何も、これじゃあペテン師のやり口だ」

所詮それは口先だけの男の戯言に過ぎない。

今彼はそういう男だ、格好をつけるだけつけて、標的に会えば怯えてただの人形と化す、言葉の重みも価値もない。

彼が殺した男の価値さえ下がってしまう。

地面に溢れる涙は、悔しさからいつの間にか謝罪に変わっていた。ぼつりぼつりと、謝罪がむがれ始めていた。ただ素振りを続けながら、ごめんなさいという声が響いていた、こんな無様な男に殺されて、口だけの男に殺されて。

「ごめんなさい、認めてくれたって言うのに」

頑張つて見せますから、頑張つて頑張りますからと、彼は必死になつて叫んでいた。

どんなに折れても惨めでも、諦める事だけは決してしませんと、もっと無様なことがある、もっとマシになつてみせる。

「あなた達を殺した男は劣らないと言わせるようになりますから」

だから見ていてくれと、殺した人々にそう願う。

人殺しが独善的に呟くのだ。それはもしかしたら自分を救う為の逃げの言葉なのかもしれない。同時にそれ以外の別の言葉なのかもしれない。

だが彼は必死であったのは間違いない、殺した命を背負うことが出来る人間はそうは居ない。だがそれを背負う為に努力していた、どれだけ無様で惨めであっても、死体をあさる様に似ていたとしても。

「頑張りますから」

間違はなく、諦めようとはしなかった。どれだけ吐き気がするほど無様なその性根であったとしても。

決意の意味さえ分かっている、ただ諦めない習性を持つだけの人間は、何度もそう呟く、頑張りますからと、諦めませんからと、それだけを生きる糧にしているように。

「絶対にあいつを殺しますから」

勝てもしないその心の弱さで、一体何が出来るといつのか、だが床にこぼれた涙はいつしか乾き、剣の音は一層力強いものに変わる。それが彼が出来るただ一つの方法で、それ以外何一つ思いつかなかった彼の謝罪の仕方なのだ。諦めずにただ武器を振るう、もう父親との戦いが迫っているというのに。

だが間違はなく、それが始まる前に、諦めることなく立ち上がることだけは出来たという証明になった。

二章 白刃すらまだ遠く（後書き）

一章で、でかい事といった主人公の心をすかさず折る。なんかこう惨めだと楽しくなってくるよね。

三章 前夜もう一つの決意

お兄様に会ってきましたと、アイシャはそう楽しげに父に向かって答えた。

その時薄らぼんやりと浮かんだ父の憤怒を彼女は見逃したようだが、彼女はその詳細を楽しげに父親に告げる。

かわいらしくただ、お兄様が意地悪だったとか、私に会いたくなくて着たとか、そんな聞きたくも無い言葉を聴かされて、内に酷い嫉妬が混じる。本当なら娘の口から他の男の言葉すら聴きたくない父親は、自分の浅ましさを責任を息子に押し付けながら、必死に表情に悪意を見せない。

自分の悪ですら彼女をけがしたくないと必死なのだろう。

すでに娘と関係すら持った男が、いまさら何を汚さないと言うのか追及してやりたいところだが、彼にとっては当然の事に過ぎない。ただ羨ましいのだ、無償の優しさを受け取る男が、ただ純粹無垢な愛情を与えられる男が、それは自分だけでいいのだと彼はそう思う。

五十を超えた男の発想かと、自信姿酷く無様に思いながらも、その考えを捨て去ることは永遠に出来ないのだろう。彼もまた彼女を偏愛し、敬愛し、何よりただ愛している。

自分の娘をただ彼は愛してしまっている。誰に取られたくないからと、関係を持って自分のものにし、それでも何の陰りも見せない娘に、彼はただ愛情を傾けることしか出来なかった。

こうやって彼女に無償の好意を向けられる男はそう多くはない。

純粹無垢の愛情を与えられるものなど、ただ彼女に屈服する機能しか誰も持たなくなるだろうと思うほどに、目の前の少女がただ全

てが美しかった。

そんな愛情を向けられることすら殺しても殺したり無いというのに、センセイはそれが許せないのだ。その無様な才能と感情が、彼女に何一つ届かないというのに浮かぶ、光の中の醜い影。

光を妬むただの悪意。

そんな悪意が彼女と出会ってみれば何も出来なかったという。分かりきっていたことだが、ただ絶望したのだろうと、ひたすらに彼女を見て食いつぶされたのだろうと。

父親は全てを見通したように確信する。そして無様に今も剣を振るっていることだろう、あの駄作はその辺りまで何一つ変わっていないと。

悪意は才能はあっても、心が破滅的に弱い、と言うよりも目の前に居る可憐な娘に対して、何も出来なくなるのだ。

そう刻み付けたのは、母の呪いであるのだが、あの破滅の魔女のずいぶんと粹な事をする、妻であるそれに彼は賞賛さえ送ってしまふ。娘の才に気付いた時点で、障害となる息子を完全に潰そうとした母。

呪いのように妹の前で何も出来なくなった理由はそれが一因ではあるのだろう。

そうやって刻まれた心の弱さが、さらに彼を追い詰めているのだろう。目の前ではしゃいで兄の報告をする娘の姿が、その無様な兄の報告ばかりで、流石は駄作と褒め称えたくなるほど哀れだった。

「ただお兄様、私の見た感じだと、お父様より強いよ」

不意打ちとばかりに伝えられた言葉に、流石の父も目を剥いた。彼女の見立てが外れるはずが無い、自分と並ぶ雅語と記載を持つ

ていることは知っているが、彼は負けるなどと考えたことも無かった。

そんな余裕すらあつたと言つのに、娘は容赦なく事実を告げた。

「だつてお兄様、手加減してるはずなのに、次の太刀がきてたら私は間違いなく怪我したもん」

彼とて娘に一太刀入れることすら出来ないと言つのに、悪意はそこまで踏み込んでいると言つ事実が、父親である彼には有り得ぬ話と言ひ切りたい代物であつた。

だが娘は間違えない、彼女が言うのなら間違いなくそれは達成された代物だ。心の呪いさえも引きちぎり、彼はその場に立てると言う可能性を見せ付けていたのだ。なんと言うことだと、初めて息子に対して嫉妬以外の気持ち湧き立つ。

尊敬ですらない、ただの恐怖だ、汚濁が娘を怪我す可能性が出てきたと、いかめしい顔が青くなって、普段なら見せない狼狽を明らかにしていた。

そんな尋常ではない父親の姿に首を傾げて見せるバンビの仕草は、可愛くはあつても流石に父親の同様に消せるほどではない。彼女は国を落とす時ですら、傷一つ無かつたような存在なのだ。

それはもはや彼にとっては神の冒瀆に近い。

「それは本当なのか」

「うん、お兄様絶対に強くなってるよ。本当に、私に会いに来てくれたんだと思うと、凄くうれしいんだ」

駄作が、駄作がと、怨念のように喚き立てる心など彼女は知らないだろう。

殺してやると言う感情が悲鳴のように心の中に沸き立っている。
男の嫉妬の見苦しさは、彼といい父親といい何ぼと変わらない。

ともども無様だ。

「そうか、そうなのか、あいつも頑張っていたのだな」

言葉との表裏を見れば、父親としての顔すら分からないだろう。
彼女の前では絶対に見せないと決めたその悪意は、光のような彼女の前だからこそ逆に、極色彩に塗装され尽くして、彼の内側が明け透けに見えてしまう様にさえ思える。

太陽が影が見えないように、彼女にはきつとその色は見えないのだろう。人の心のうちにあるその汚濁を、ただ彼女が人を怪我すように、楽しげに何度も兄のことを父に話していた。

「そうなんだよ、だから一緒に暮らせるようになるよ。また家族四人で」

「駄目だよ、それは駄目なんだ、あやつはすでに男爵家の人間、没落したとはいえその当主なのだよ、家を持った男が、実家に戻るなんていうのは、お前の兄上を侮辱しているような行為だよ」

あれと暮らす、考えるだけで気が狂いそうになる。

少しばかり彼女をとがめるようにじつと目を合わせて、そのたびに内に燻る嫌でも分かる嫉妬を必死に隠そうと足掻いている。

目の前に息子がいようものなら間違はなく、鼻で笑うような隠し方だろうが、この大事な人を盗られてなるものかと、男は無様に否定を繰り返していた。

「え、そうなの、そうだよ、お兄様も家を受け継ぐような人になつたんだ。そうかそれでこの御前試合で力を見せ付けて、お家の復

興を考えているんだ」
「そうかも知れんな」

たしかにここで自分を倒しでもすれば間違いなく、男爵家は復興できるだけの名誉を得ることは出来るだろう。

むしろそれが目的であれば逆に、こんな気持ちを彼が抱くことも無かっただろう。

凄い頑張りやさんだお兄様はと驚いた表情を向けて、そんな事を彼女が言ったびにこの男は胸が締め付けられるようだった。

何でそうやってあれを褒めると、お前が口にしていいのは私だけの筈だ。

心の中で何度そう悲鳴を上げているのだろう。それを表に出さない態度は以上とも思えるほどだ。

「じゃあお父様も頑張らないと、十分に休息をとって、お兄様を助かす気で行かないと、男爵家の復活も無いんだよね」

明日殺すと断言している息子の為に、十分に休息をとる。確かに理にかなっていると言いたいが、彼は震えていた彼女の言葉に。

自分はその男に負けるかもしれないと言う事実を口にした娘の言葉に。あれに家族に対する慈悲は無い、明確に殺しに掛かることぐらい理解していた。

そうなれば目の前の娘の甘やかな体に触れる事すら出来なくなるかもしれない。そう思うと気付いた時には彼女の体を抱きしめていた。

「止めておけ、そういう事は、あまり言うものじゃない」

「んーけど今日は駄目だよ。そういう気分じゃないもん、なんかお兄様にあって体が暖か、ん？んーん」

喋らすものかと唇をふさぐ、あれの言葉なんて聴きたくないのだ彼女の口から。

困ったように声を上げる彼女の声を聞いても止めることにしか必死になれなかった。まるで白い着物に墨汁をたらすような様相、手の平の窪みから甘い痛みがこぼれて足の先に伝わるような、酷く緊迫した線のような快楽が痺れを持って伝わってくる。

くるしーと言っているのだろう、彼女の視線を見ても、今だけは彼女の瞳には自分しかいないと思うと、年甲斐も無く胸が勝手に呼吸しているような温かさを感じてしまっていた。

大切なのはお前だけなのだ、彼は心で叫ぶ、お前以外は必要ないのだと、彼は心で叫ぶ、口に出来ないその言葉を彼は叫び続けていた。

それを口にすればきつと彼と彼女は終わるだろう。元々が終わり果てたような関係だ、簡単に破滅してくれるのだろうが、だからこここまでしておきながら、娘を愛した父親は、その最後の一線を越えられない。

娘を抱いた男はそこまでしても言葉だけは使えなかった。

それは世間体などではない、それを言えばきつと彼女が穢れるから、自分が大切に思い続けた少女が汚れてしまう。

その太陽のように笑う笑顔を陰らせてしまう。

彼はそれが恐くて仕方が無かった、こうやって口をふさいでいる自分さえも、本来であれば、自分で無ければその場で斬り捨てるほどに醜悪な行為。

困ったような顔をしながらでも彼女はこの行為を受け入れる。これも家族のスキンシップだと思っているのかもしれない。

何も知らないような聖女は、ただ笑顔で何もかもを受け入れる。彼はそんな彼女を優しく抱きとめながら、彼女が腕の中で身を擦っている、少し窮屈なのだろう、まだ生まれて数ヶ月のまるで綿毛のような子猫が身を擦る姿にも似ていた。強く力を入れるだけで、くしゃりと潰れそうな彼女の形はやわらかいけれどしっかりとっていた。

離してたまるかと、娘を強く抱きしめる。大切な人を彼は守ろうと、傷一つ着けてなるものかと決意する、それが息子だろうと世界だろうときつと代わらない決意になるのだろう。

そんな決意を彼女は知らない、そもそも彼女はきつとそんなことすら軽く踏破してしまうだろう。それでも彼は守りたいのだ彼女を、必死に必死に、ただ愛した人を、その思いはきつと彼女と同じぐらいに美しい思いだろうけれど。

それが人を救う言葉ではない。所詮それはただの宝石と同じ、実が伴わなければ意味が無い話。

「お父様、これでお預けです。ちゃんと体を休めて頑張らないと、本当にお兄様に殺されちゃうかもしれない。気の緩みは命を奪いかねないんですから」

彼はそれを用意できるわけもない、もうこの結末は明確に決まっているのだ。軍神に傷をつけることの出来る可能性のある男と、不可能な男、その差は間違いなく如実に現れる。純粹な実力の差と言う現実が、彼には待ち受けているのだ。

その思いが息子を殺すことが出来るのかは、それこそ神のみぞ知るといふ奴だろう。

「大丈夫だ、あやつに負けるつもりなどさらさらないのでな」

そういつて娘の頭をなでると、まだ冷めぬ自分の興奮をゆっくりと娘の笑顔で冷ます。

負けぬと、あれを殺して大切なものを守ると、震えだした体を必死に抑えながら彼は、その決意を新たにし、娘の甘い体を思い出して心を休めてようやく彼は、完全に眠ることが出来た。

三章 前夜もう一つの決意（後書き）

なんかおっさんの純愛を必死に書き続けただけっぽい気がする。

外伝 日記

届かない、何一つ届かなかった。

生まれて初めて妹と簡単な剣の稽古をしたのだけれど、僕は何一つ出来なかった。

簡単に剣をはじかれてお終わり、悔しくて涙が止まらなかった。

お父さん達は妹を褒めて、僕には何も言わなかったけれど、きつとすごく失望させたんだと思う。

ごめんなさい、初めて剣を持った妹に負けて本当にごめんなさい。妹にも今度からは負けられないように頑張る家から、いっぱい頑張るから、少し僕のほうを向いてください。

パラ、パラと、誰かが日記を見ていた。一日おきに、一月飛ばしてみたりと、少し悲しげな視線をしながらその日記をめくっていた。そんなにもその日記の持ち主がかわいそうなのか、内容がどんなものなのか。

また妹に負けました、悔しいけれど妹が強いことは、兄としてとても誇らしいと思います。

けどお兄ちゃんには妹を守るぐらい強くないといけないので、もっと頑張つて練習しようと思います。

最近はお父さんも剣を教えてくれなくなって、お母さんも魔法を教えてくれなくなりました。

妹ばかりに教えています。けれど当然のことです、妹はまだちゃんと剣使ったことつが無いので、ちゃんと教育をしてあげないとどこかで怪我をしてしまうかもしれません。

そういうことをちゃんとお兄ちゃんとして教えてあげようと思

ます。必要ないかもしれないけれど、妹はそうやって周りの人にするという事を教えていける人になると思うからです。

ずいぶん優しい言葉で書かれていました。

その少年は結構まめな正確だったのでしょうか、ほとんど欠かさず毎日のように、日記を書いていました。

内容は妹と家族のことばかり、妹に負けたとか、妹はとても優秀だとか、自分はもっと頑張らないとか、お父さんともう一月以上会話をしていないとか、っそういう事ばかりが書かれていました。

その日記を見ている私はどう思ったのか一度、パタンと日記を閉じました。

そしてなんとなく適当なところでまた日記を開きます。

今日お父さんに剣の筋がいいと褒められました。

流星は俺の息子だって、持ち上げてくれて振り回されました。ちよっと目が回ったけれど、僕はお父さんの子供なのでとても誇らしかったです。

お母さんが教えてくれた魔法も、もっと頑張ってお母さんが喜ぶ姿をもっと見たいと思います。

今はお、僕の妹が小さいので我がままを言って邪魔をしてはいけません、妹も守れるおにいちゃんになるうと考えていっぱい頑張ります。

それはまだ妹が生まれる前の日記でした。ずいぶんと早熟な子だったらしく、だいぶ早くから日記を書いていたようですが、これも彼が非凡であったことの証明なのでしょう。

その手紙にはこれからの日々に対する希望が書き連ねてありました。

妹を守るとか、父や母などと、これから数年またげば、全てなかつた事にされるといふのに、それでも頑張ろうと日記に書き続けた少年は、ある意味では誰よりもまともではなかつたのかもしれません。

けれど幼い少年の心からの決意だったのでしよう。

みんなの為に頑張ろうと、僕が妹を守るんだと、なんとも素敵な言葉が書かれているではないですか。

それが終わるまでの彼の日記は、日々が輝いていたのかもかもしれません。

だってそれは彼が太陽だった時のお話なんですから。

まだ家族に太陽としていられた時、それがあなるなんて誰も思わなかつたでしょう。

太陽が尽きれば光もない塊です。

何一つなくなつた後の彼の日記はそれは、それは面白いことになつていました。

もう家族と話すことすらなくなつて、久しぶりに父上と話してみれば。

男爵家へ養子にいけといわれて、もう泣くしかなかった、そこまですらないと思われていなんて流石に、いやもう目をその事実を目をそらすことが出来なくなつた。

妹、妹が、あいつが居るから、あいつが生まれた所為で、そこまです僕は駄目なんだろうか、ずっと頑張ってきたけれど、何一つあいつに届かない。

結局才能のある子供だけしか父上は要らなかつたのだろうか、母

上は必要なかったのだろうか、僕は、そこまで要らない代物だったんだろうか。

けれど、今日妹を殺そうとして分かった事がある、僕はもうここにいられない。

ここにいれば僕は何もかもが終わってしまう。次の家で頑張ろう、この家のことを忘れるくらいに家族を大事にしよう、妹を忘れるくらいいろいろな事をして、男爵家を発展させよう。

きっと要らない子供を押し付けられたのかもしれない、新しい家族を守るために頑張ろう。

このページはやけに皺でよれて歪んでいた。

泣き腫らしながら書いたのでしょうか、よつぽど何かに吐き出したかったのは分かりますが、これからさらに数年後の日記はさらに面白かったです。

もうかれはその時完全に終わってしまったのでしょうか、そう考えればあの御前試合の結末も分かると言うものでしょうか。

それが彼のかごが唯一分かる代物なのです。

それ以外はその時大体終わってしまいましたから、あの惨劇のあとに、あの御前試合は良くも悪くも歴史に残りましたから。

そして最後の彼の日記です。

もう殺そうかあいつ

ただそれだけでした、何があつたか分かりませんが、ただそれだけです。

結末を知っている身とすればなんと分かりやすく、なんとはた迷惑な言葉でしょうか、ですが同時に恐怖しかありませんでした。

なんでこんなことにと、何でこんな風にと、そう思うと恐怖がわいてくるのです。

その少年が壊れて崩れ果てるまでその様は、恐怖と言つ言葉でしか表せませんでした。

彼がそんな風になつてしまつた完全な原因はきつと、ちょうど日記が終わつた時から始まるのでしよう。

日記が終わつた日、男爵家の没落こそがその完全な原因でしょうが、そこで何が起きたのか詳しい資料は残っておりません。

ただそこでおきたことで彼は完全に終わってしまったのだと、この日記を見た私は思わずには居られないのです。

外伝 日記（後書き）

外伝なんて書くつもりはなかったけれど、維持でも更新したくて無理やり書き上げました。

ちなみに何本か書くかもしれないし書かないかもしれないけれど、外伝は全部本編終了後のものです。それだけは間違いないと思いますよ。

四章 精神の薄氷

何一つ無い、何一つ彼の手には余る。

体力がなくなり倒れるまで剣を振り続けたそれは、訓練所で倒れているところを侍女に発見されるまで気付かれることは無かった。

注意されたがそ知らぬ顔で、なんか寝てただけでしょうと適当に返してみたが、発見者の侍女は顔を真っ赤にして起こっていた。

実はこうやって心配されると言う経験が無い為、冗談で和ませようと考えたようだが、すまない場合があることを頭に刻み付ける程度に社会学習するべきだと、なぜ酷く怒られた。

確かにあんなところで御前試合の参加者が倒れていれば、また参加者死亡と言う、不穏なうわさが流れ、今度こそ王の面子を潰しかねない。そうなれば本当にあらゆる方面で色々と笑えないことになってくる。

頭の回りは悪くないはずなのに、彼はそういうことにやけに無頓着だ。

どこか人生が壊れている人間だ、それは仕方ないのかもしれない。注意してくださいと当たり前前の説教に少しばかりうれしくなったのか、悪かったと珍しく仏頂面から朗らかな笑顔を見せていた。

その時侍女が目が赤いけれど大丈夫かと言ってきたのだが、それは単純に泣きながら素振りをしていた所為なので、少し腫れぼったくなって居たりしたのだが、次女はそれを心配していたようだ。

だが流石にそれは男の子だったようで、恥ずかしがりながら視線をそらして、色々あったんですとしかいいうことが出来ず、昨日を思い出して少しばかり困った表情になる。

「僕だって男の子なんです」

などと稀代の名言を吐きながら、侍女から逃げ出した、妹を殺すと息巻いてた男は、その事実の説明をしたくないがために、己の身体能力の全てを駆使してその侍女を振り切った。

結局そんな試合前に起きた参加者の不祥事は、そんなのりもあって騒ぎになる前に終わったのだが、あれだけ震えまくってたくせに、今はずいぶんと余裕があるものである。

彼が言うには男の子らしいので、これ以上は追求してやらないのが優しさなのだろうが、この御前試合が終わるまでの課題が一つ分かった気がした。

「心が弱い、あまりにも弱いんだ」

才能じゃない、負け犬根性が染み付きすぎている。

原因は過去の事であるのは分かっていたが、ここまで酷いとは思っていなかった。思い出すだけで菌噛みするのは仕方の無いことだろう。

弱いと、自分は弱いと彼は、自虐しつづけ、自嘲を極めて突き抜ける。

乗り越えないと思う。そうじゃなければ彼は何一つ始まりもしないと、小手先だけが身についたって、ここぞと言う時に崩れるなら彼にとっては価値の無い代物だ。

「古傷が痛むな、心も体も、あいつと当たるまで三日、無理難題過ぎるだろう」

見ただけで心が潰れて死んだのだ。

どうすればいいんだと泣き叫ぼうにも、今までの人生でそういう事を相談できる相手もない。

人とのつながりと言う意味では希薄すぎるだろう、一人の殻にこもることしか出来ない。彼はそれぐらいしか機能を保有していないように、周りとのつながりがある一つをおいて断絶していた。

その繋がりが妹だけと言う、なんとも酷い人間関係。妹なんて好きでもないというのに、過去から全てつなげて結局残ったのがそれだけ。

彼が終わってしまったから、残ったその絆を断ち切る為だけに動いていると思えば、もうこの終わりがどうあれ、彼はきつと何も残らないのは間違いなかった。

もう剣だけを振る人生に変わるかもしれない。本当に極限まで人の絆が薄れたら、最後に残るのは手元に残るそれだけだ。完全に孤立する為だけに動く人など、その行為全てが破滅だ、残るものなど何一つ無いのと変わりは無い。

そんな事を彼が考えると、自分はもしかして死にたいだけなんじゃないかとすら感じてきてしまう。

それぐらいには、彼には何も無いのだ。

妹を超えたいんじゃない、ただ殺したい、復讐ですらない。ただ殺そうと考えているだけでここまで来てしまった彼だ。

けれど、彼はそれでもよかった、残らないことがじゃない。

妹を殺すことだけでよかった。それぐらいに何も残さなければ、あの化け物には届かないのだと確信していた。

妹、妹、妹と、それだけしか彼には無いほど、彼の頭には妹しかないのだ。

だつて今まで父親の考えが出ることにすらない。剣聖のことなんて最初から眼中に無いのだ。そもそも次が父親であるかすら彼は気にしていないのかもしれない。

商店に定まつた妹だけを彼は見据えている。他の誰にも負けるわけがないと言ふ発想は、父親の決意を軽く罵倒しているだろう。だが今まで彼にそういう扱いをしていたのは父親のほうだ、自業自得であつてもそれ以上ではないのかもしれない。

「強くないと、本当にそうじゃないければ、戦う前に終わってしまう」

それよりも戦う前に壊れてしまう自分が恐かった。

またあの醜態を晒すのかと、そう考えるとたっているのすらあやふやになる。あの笑顔が彼を押しつぶしてしまうと思つほどに、手が思い出すたびに震えている。

死んだものにしか絆と呼べる絆の無い男だ。

しかも殺したと言ふ言葉ついて完成するような代物。

ましてや最後に殺した男など、自分を最後にまで褒めて死んでいったような傑物だ。彼の重さが一番つらかった、あなたを殺した男は恐怖で動けなくなります。

そんな事があつていいはずが無いのに、事実そうで、そのまま壊れてしまいそうになることが、あまりにも殺したことすら無駄と言っているように感じてしまう。

殺した責任の重さ、自己の満足の為とその為に殺したからこそ、彼はそれにとらわれ続ける。たぶん根が優しかったのだろう、だからこんな事さえも抱えてしまう。

さばさばと割り切つてしまえばこうもならなかったのだろうが、そうなるには彼は優しすぎたのだろう。だがそのおかげで足掻いて

いられるのかもしれない。

強くなるうと考えるけれど、心を鍛える方法なんて分からない、いつものように剣を振って何かが変わるわけじゃないのだ。百年たとうと何も変わらないかもしれないけれど、いつかころりと変わっているかもしれないのが心って奴だ。

足掻いてやると思う、彼にはそれだけしか機能が備わっていないのだ。頑張りうと言いつけて実行するだけ、課題はあるがどう乗り越えるべきなのか、探し必死になるのも糧になるのだろう。

必死になっている、あの無様はもうしないと心に剣を打ち込んで、自分の生涯を相手に刻み付けてやると、お前の完璧さなんて俺は許さないと言い張る為に、今度こそ、そう本当に今度こそ。

「出来るのか」

出来るのだろうか本当に、どれだけ思い決意も力の前には轢殺されるのが当たり前間の帰結なのだ。

意思を張る為の力が泣ければ、どれだけ確固たる意思が在ろうと価値があるはずも無い。妹を殺すほどの意思があるとして、妹を殺せるほどの力があるのか。

「あーもう、何を考えても悪いことばかりだ」

泥沼だった。悪いことばかり思いつく、たぶん妹と言う存在を完全に認識してしまった所為なのだろう。

一つ決着をつけても、また一つ問題があがって、それが全部、全部、心の問題なのだ。

いまさら力がつけられたとしてもある程度、心に問題があるのだ。泥沼のようにはまるマイナスの思考、これなら剣を振っているほう

がましだと思つが、また訓練所で県でも降つて居ようものならあの侍女が飛んできそうな気がした。

そうなると流石に困る、御前試合が始まるまであと数時間。寝るにしても微妙な時間は、彼の日々の生涯でも珍しい手空き時間と言ふ奴だった。頑張ると言ふ言葉だけで生きてきたような人間なので仕方ないと言えば仕方ないかもしれない。

何もしないと言ふのがどうにも苦手なのだろう。

無駄気思考を重ねて泥沼状態に陥つたりと、時間を作ると悪い方向にしか進まない典型は、マイナス思考の塊となりつつあつたが、何かしようと考えて、辺りを見回してみるが、さほど自分の暇をどうにかしてくれそうなものは無かつた。

やっぱり素振りかと思つても見るが、あんなわけの分からん言葉を言つて逃げ出した手前、なんと言つか気まずいと言つか流石に彼も顔をあわせづらい。

羞恥心が無いわけでもないのに、人並みに感情がある彼には流石につらいのだろう。自分のいった言葉のないような無さを考えれば仕方の無いことだ、意味が分からない。

これから一体どうしたもんかと、首を傾げながらとりあえず自室を目指してみるが、途中声を掛けられた。

「おや、魔剣の頑固者を殺したつて奴じゃないか」

それは神童と呼ばれた南方の守護者、彼の妹ほどではないにしても、才能だけなら豊かな北と南の太陽だ。

だが彼にはあまり興味の無い話だったりする。彼と彼女ではあまりにも差がありすぎた。

「あ、どうも」

「そう薄い反応だと悲しくなるじゃないか、こっちはあの魔剣を殺したって言う剣士がどんな人物かって楽しみにしてたんだぞ」

部屋に行ってもいないし、探してたんだと、楽しげに肩をたたいてくれた。

彼は魔剣のライバルと呼ばれた天才だ。だからこそセンセイに興味を持ったのだろう、人たちで自分のライバルを殺し、傷一つ負っていないというのだから。

「どうやって殺したか、なんてのは御前試合があるから聞かないけど。あいつ満足して死んだのか聞きたくてな、実はあいつを殺すのはきつと俺だなんて思ってたからさ」

「殆ど不意打ちですよ、見事なんていつてくれましたけど、まともな闘いなんか最初から用意してませんでした」

どうしても出たかっただんと、彼は言葉をつなげた。

だが逆に彼は驚いた様子で先生を見ていた。

「あいつが見事だつて、お前よっぽどじゃないか。あの頑固者が人を認めるなんて、よっぽどの使い手だぞ、こっちは馬鹿馬鹿と言われ続けてたのに」

ただ賞賛で彼を迎えた神童ヒルメスカ、罵倒さえ覚悟していたと言うのに、故人を知っていたのだらう逆に驚いて見せてくれる。

殺した相手から繋がった縁、それに驚いたままの先生だが、それがつながりとなんて思っても居ないのだらう。

「楽しみになってきた、軍神はちょっとつらいが、一つ目標が出来たってもんだ。二回戦で順当に行けば俺とあんたが当たる、その時

に存分に語るうぜ、剣聖なんか打ち倒してくれよ」

すぐくうれしそうに笑った、絶対に負けられないから次の戦いで会おうと、そんな事を言ってくれた人間は居なかったのだ。

ほほが緩むのがわかってしまうほど彼は笑顔だったのだろう。

「分かりました、負けるつもりはないので気にしないでください」
「その時には不意打ちじゃないと、どれだけ魔剣が強かったか教えてやる。あいつと同格の俺だからな、絶対に見せてやれると思うぞ、あんたのその暗い顔を晴らすぐらいには、こっちにもいい目標になるし一石二鳥だ」

だがあんたも相当強いのは分かるさと彼は言っていた。

魔剣相手に人たちが決着できる腕前、ましてや日々が戦場と言いつ張っていた魔剣という男の不意をつくなんて異常を成し遂げた偉業に、ヒルメス力は感動しか出来なかった。

だから彼にとっても倒すべき目標が一つ出来たのだろう。

目の前の剣士、魔剣を倒せるだけの實力を持った存在。自分の目標がまた定まったと喜んでいた。

しかしそんな褒め称えるべき目標は、すぐくばつが悪そうに呟くのだ。

「目標にしても、意味無い。あなたや魔剣のほうがよくばつが強いよ」

それに目を丸くした神童の姿があったが、そのあとに困ったような顔をしたまま、視線を左右に動かして動揺している発言の主に、腹を抱えて笑うしかなかった。

見当違いの発言でもしているようしか聞こえず、彼の言っている言葉がやけに子供っぽく聞こえたのもそうだろう、目の前の魔剣を

殺したセンセイと言う男は、自分に自信が無さ過ぎた。

「こっちの勝手だ、そう思えるからこっちがそうするだけだ。あんたはあんたが思うよりは間違いないくらい強いんだよ」

一体どれだけ上と比べてるんだと、目に涙を浮かべながら笑って、先生に視線を合わせて肩をたたく。

少しばかりその手の力が強かったのは、魔剣はあんたに負けたんだと、あんたが自分の言葉を否定することだけは許さないと言う意思があつたのだろう。そして同時に、それだけ魔剣を認めていたと言う感謝もあつた。

「そこまで自分が信じられないなら、俺と戦って勝ったら強いつて信じろよ。負けたらそのままでもいいさ、あんたが強いって言う男が言っただそれで十分認められるだろう」

これから殺しあう相手に彼は、進むべき言葉を与えて、頑張れなんて告げていた。

こっちは全力であんたとやりあいたいんだよと、格好をつけて気取ったように言ってくれやがった。

四章 精神の薄氷（後書き）

なにこの神童の快男児ぶり。

五章 御前試合開幕

俺の言いたいのはそれだけさと、一人あまりにも清々しい男は去っていった。

いもうつと同じように輝いているはずなのに、彼には驚きしかなかった、ひとつとして悪いと思うことが無かったのだ。

綺麗な人間の筈の神童と呼ばれた男、だが妹に感じたような嫌悪感は一切無かった。

同じ存在の筈だと言う彼の疑問を解消するものなどいない。

それが気づけるようになればきっと、自分の何かが変わるんじゃないかと、彼の戦いを心待ちにしている自分が居たことに彼は少しだけ驚いていた。

今までの貪欲などす黒い執着じゃない。

何か別の感情に酷く戸惑っているようにさえ思える。

人との繋がりが出来て、初めて知った戸惑いは、彼にはあまりに刺激的過ぎて、ここに着てから驚きしなくなり、いつも何かに怯えて戸惑いあせっている。

ここに来るまで、彼が何をしていたと言うことは無い。ただ武器を振っていただけ、そんな人間の触れる絆は、全てが色を変えて新鮮なものではあったが、膨大な人という情報量は彼をどうあっても困らせる。

優れた人間かもしれないが、人の機微とは所詮経験だ。それ超越できるものはただ反則じみた魅力で人を捉えるような彼の妹ぐらいだ。

それ以外の人間は、ただ人と付き合いその中で得る経験で、それ

を手にするのだ。

その経験の無い彼は、戸惑うしかない。人と話しかけることすら難しいかもしれない、用は対人恐怖症の一手前、それ以前に人の会話と言う行動を理解していないかもしれない。

それぐらい彼は、人と人の繋がりが薄い。

同時にまた会いたいと思ったのは、ある意味では妹だけ、きっと魔剣もああいう人物だったのだらうと思うと、自分がなぜちゃんと剣を合わせなかったのかという後悔さえ芽生えた。

神童は妹とはまったく違う、なぜ会いたいと感じて、また話してみたいと彼は思ったのか。

それはきつと魔剣と同じく、彼らがセンセイのあこがれた存在だからなのだ。ああ生きていられたらきつと自分は、妹を殺そうとなんて考えなかったらだらうと、それぐらい彼らは強かったのだ。

「うらやましい、な」

それが多分彼が最も欲しかった強さなのだろう。

今際の際にすら人を認められるような人間、しかも卑怯な手で殺された相手にすら、だから彼は魔剣の死をいまだに引き摺り歩みを重くし、同じような人間を見て羨ましいとこぼす。

僅かに鈍く痛む心は、きつとそれを妬む気持ちだ。

なんでなんだと、なんでこっちはそのなれないんだという。彼の抱えた嫉妬と言う気持ち、羨ましくて仕方が無い。

何であんなに、なんであんなに、何もかもが妹より綺麗に見えてしまうんだらうと、そしてそんな彼らに殺意よりも、尊敬が先にたってしまう。

「あの人たち反則だろう、ずる過ぎる、あんなのどうすりゃいいんだよ」

心臓をつかむように胸をつかみ、何で強くなってくれないんだと叫び散らしたくなる。

自分の弱さなんてしっている筈なのに、光があればあるほどやっぱり自分が穢れて見える。

この惨めな執着心、どれだけ太陽を見ても帰ることの出来ない感情、嫉妬と言っただけのそれは、彼が生きる意味にすら変わっていた。行動原理の全てがそれに集約していくほど当たり前の行為。

だからこそ、それしかない自分が汚らわしく見えてしまう。

羨ましいと呟き、羨ましいと嘯くようにさえ感じる、本当に羨ましいのかと自分に問いただすように。

分かっているのだ、彼だって自分の心の弱さは、この溢れている嫉妬。どう会っても消せない悪意と言う悪意、妹から生まれたそれは、彼らのようには生きていられないと言う事実の証明だろう。

だから羨ましい、ある意味では妹よりも手の届かないそれよりも、本当の意味で手が届かないと知っているから。

自分はあるなれない、なれる筈が無いのだ。

それでも彼は待ち望んでしまっていた、自分がなり勝った人は一体どんな人なのだろうと、所詮は揃いも揃って剣でしか語れない者達、だからこそ万の言葉よりも剣で語り合いたい。

「勝てる気がしないんだもんね」

試合では負ける気がしない、勝てないとは思わない。

だが勝ったということができない、きつとそんな闘いになる。後

に残るのは魔剣と同じ時の喪失感だけ、喜んだあの時と同じ何かが消える感覚。

ポツリと呟く。

「頑張ろう、頑張ろう、じゃなけりゃ殺したことすら無駄になる」

そう言い聞かせる言葉は自分が自分を保つ為のいいわけだ。

今は弱いんだから仕方がないと、そう言い訳のためだけにその言葉を使っている、そう彼と話してからは思うようになってしまった。渦巻く思考のマイナスに、どうやったらいいんだと悲鳴を上げたけれど、それを受けれてくれる人間はどこにも居ない。

死ぬまで苦しみと言っているように、心の中にまた一つたわみが出来て、何かが歪む。

けれどももうそうやっていいわけが出来る時間は少ない、立ち上がって歩き出すしか許されない、時間はそこまで彼を追い立てているのだ。

あと少しの時間、それで彼はこれ乗り越えて歩かなくてはいけない。

自信の決意がそれほどに弱いものだと言いつ張るわけにはいかない。いまは、今はまだいいかもしれないが、そうじゃない時がもう迫って追い立てる。

その時自分は剣を握ることが出来るのだろうか、妹よりも前の尊敬すべき相手に、自分は剣を向けることが出来るのだろうか、途方に暮れる。

弱すぎるのだ、能力と精神のその異常のアンバランスな状態が、彼の全力を妨げている。

軍神に傷をつけることすら可能と言わしめた男が、己の心の弱さによって力を封じられているのだ。

この部分が彼にとっては致命的な弱さになる。

「けどどうすりゃいいんだ、俺には何にも残ってないんだぞ」

普段の仮面すら纏わず、ただ途方に暮れる。

あまりにも神童の心が羨ましくて、自分がどれだけ弱いのかを刻み付けられる。抗えるのだろうか、その土壇場、死ぬ間際ですら抗うことが出来るのだろうか。

届かない、空の月を水に飼うように、掴んだと思っても朝になったら消えてしまうようなものだろう。

何一つ届かないのだと理解させられる、したくも無いのにさせられて、結局自分は妹には届かないと言わされる。

どうすればいいのだろう、そんな悩みを時間は解決してくれない。どんな名探偵よりもまじな回答をしてくれるそれは、所詮は後回しの発展系だ、時間の無い奴には何の効果も無い。

追い立てる時間と言う取立ては、侍女という形を持って襲ってくるが、こればかりは勝てもしないので、言われるがままに支払うだけだ。

そうもう誰も彼の悩みなんて無視して動き出す。

疑問も無いただ漠然と、真剣を使った御前試合が始まるのだ。軍神が最強であると言うデモンストレーションの為に呼ばれた、いずれ劣らぬ者達のその全てを競う闘い。

分かっているも軍神と剣を合わせたかった者達、もっと別の目的を持ったものもいるだろう、だがもう始まるの間違いなかった。

ただ一人王の護衛として軍神が控えてはいるが、それだけで分かるだろう、彼女がどこまでも最強であると言うことが、そしてそれに不釣り合いなほどに愛らしい姿は聖女なんて呼ばれ方をしたりするのかもしれない。

それだけ彼女は王に信頼され、同時に最強だと言われているようなものだ。

なによりそんな事をわざと証明する為に、王国の名だたる使い手たちを集めたのだ、それこそ新旧様々だろう、あらゆる世代の最強と呼ばれた者たちを集めて、することは軍神の証明。

彼女であれば誰にも負けないと言う、戦意高揚と、何より他国への牽制だ。

だがそんな思惑は知ったことじゃないのがそこに居るセンセイだったり神童だったりするのだろう。

軍神を殺そうと考えている奴と、それと戦ってみたいと言い切った男、王の長い演説が何を言っているのか、こういう場に出ると考えよりも先に、ぶっ倒れた所為での倦怠感や、そもそも寝てないせいで睡眠不足ということもあり、眠気が今の最大の敵になっていた。

人類最強の敵の一人と激しい戦いを繰り広げるが、中々の劣勢に少しばかり追い詰められてきた。隣に居た一応父親はそんな彼の態度に、このまま剣を抜いて無礼打ちしてやろうかと考える始末だ。

実は鏡面のような二人の邂逅だが、彼は父を視界にすら入っていない。と言うか今は眠気以外は敵がいないので当然だが、万全でも無視されたことは間違いないだろう。

始まるまで、何一つ親子の会話は無い。

それでいいのかと答えられれば、それ以外の選択肢は無いだろう。いつか認めて欲しいと言っていた筈の父親すら彼の視界には無いのだ。彼は憧れと嫉妬以外で人を認めていないのかもしれない。

努力で心が磨耗しきつたのかもしれない、捨て去った何かを今取り戻しつつあるのかもしれない。

だが分かっているのだろうか、悪意を向ける相手を見捨てる。

それをしたのはただ一人だと言うことを、彼の妹だと言うことを、忘れていないのだろうか、それは自分も同じ穴の貉と言っているだけだと言うことを、嫉妬と言う感情しかないような男は、隣の男の嫉妬に気付かない。

殺してやると願う二人、だがそれは総じてずれていた。

父は息子に、息子は妹に、妹は別に誰にも、誰一人向けるだけ向けて、対象には気付かれても居ない。

さすが家族と言うべきなのだろうか、殺しあうだろう二人、どちらが死んでも気づきもしないことだろう。

相手の嫉妬と無関心に、この家族はきつとどこかで終わっているのかもしれない。あまりにも似通いすぎている。

「各々の技術を見せ付けてくれ、以上である」

そんな王の締め言葉の言葉を聴いても、誰もきつと価値を持っていない。

ただ軍神に負けると言われる命令の為にきた者もいるのだ。これは全部が出来レース、そんな事をしなくても誰もがわかっているというのに。

だがそんな出来レースの第一戦は、家族同士の戦いだ。

父と息子、ある意味では父越えの戦いでもある。ルールの説明を観客にしながら、始まりに向かって体を整える二人。

その説明が終わった時始まるのがきつと彼らの殺し合いだ。

その決戦の舞台に晒された二人、どちらも剣も構えずにゆったりと立っている。犬齒としては同じ流派だ当然と言えば当然だろ、どちらもが最強と言える構えのまま、その始まりをゆっくりと待っている。

軍神はその戦いを興味心身に見ていた、兄はどれだけ強くなったかと、何より二人の大切な家族の戦いだ。彼女にとっては楽しみだった、あの弱かった兄の本領が見れると、これでまた昔みたいに仲良くできると。

これで兄が父に勝てばきつとまた仲良くできると、だから二人とも頑張つてと笑っていたように思える。

だが決着はあまりにも容易くついでにしまつ。

しかしその戦いの決着に彼女は兄の生涯を見失ってしまうだろう。たった一瞬の出来事であつたとしても、兄の極めた剣の終着点の一つ。

その証明を妹に見せ付ける事になる王都御前試合第一戦目、その始まりは、高らか宣言されそして、一瞬で終わってしまった。

その血の溢れる音によって。

五章 御前試合開幕（後書き）

だが次の章は少し前から始まる。

そして土日には更新しないけれど、その前日に更新しないと言った覚えは無い。

第六章 ただ再現される月日の形

剣聖と惨敗の戦いが始まる半刻ほど前、今観客達に対して説明や余興などが行われて、周りは程よい熱気に包まれている。

その熱気を受け流すように、ただぶらりとたっているのがセンチイ。

彼の頭の中には一つのことしか頭に無い、自分が弱いというそれだけ、それだけを頭にぐるぐると回し続ける。誰かに相談できれば、もしかすると解決するかもしれない内容だが、それが出来ない男は、ただ自問自答の迷宮に迷い込み逃げ出すことすら出来ないだろう。

それも少しの間であるが、ここは選手の控え室みたいな場所だ。

個室を与えられたりと言うわけではないがそれなりに広く、体を温めるために数人が体を動かしていた。中に派遣を振っているものも居る、自分の身長のはあるだろうかという剣を、片腕で振り回す光景は蹂躪すると言う行為を体現したような姿だ。

あれがかの有名な無双なのだろう、見た目はまだ若いと言うのずいぶんと荒々しい剣を使うと、だがあれでは御前試合には向かないのだろうと同情した。あれは軍隊と戦う為の剣である、ここに居る剣士たちの中でも対集団戦にむきすぎた戦い方に、さすが軍神の当て馬と同情してしまう。

ザインザイツと呼ばれた女騎士、西方の魔人とも呼ばれる王国の理不尽の一人ではあるが、王の命令の為に当て馬になったと言うところだろう。

彼女は忠義の騎士としても有名だ。見栄えが派手な女騎士二人の戦い、観客達も喜んでみることだろう。ましてや殆ど巨塊とも言うべき剣を振り回す存在が敵なのだ、分かりやすさと言う意味では群を抜いている。

だが負けると言われなくても軍神相手では、ここに居る相手すら雑魚と十把一絡げという奴だ。だからこそ己の全霊を出せるようにと体を作っているところなのだろう、自分よりも幼い敵に、自分の限界を見るために。

たぶん後とする相手が彼女の周りには居ないのだろう。今のままでは成長の頭打ちになってしまうと、そこに新鮮な空気を取り入れるつもりなのか、忠誠の騎士と言う割には存外打算的だが、絶対を見ればもう開き直りしかない。

彼の憶測には違いないが、外れではないのだろう。これをいえ無双は凶星をつかれてあわててしまいかもしれない。もしかしたら怒り出すかもしれない。

多分の軍神が強すぎるから勝ていない事を前提に物事を組み立てている。

それこそ自分のような馬鹿でなければ有り得ないと苦笑してみせる。

せめて一太刀なんて思っていればその忠誠後と食い殺されると、あの妹はそれほど理不尽なのだと、自分が知っているありとあらゆる人類の最終形態のような彼女の姿を思い出す。

だが前のように手に極端な震えが出る事がなくなっていた事に彼は驚いていた。いやそれ以上に、妹のことを思い出して笑えるという自分の姿が想像できなかった。

「あれ、え、なんで」

沈黙を保っていた彼の体に灯がともるようだった。

何がおきた変わらぬ自分の手を握ったりは振り回したりして見せる、偽りと思っていたはずのそれは、やはり自分の体で、何が起きたかすら彼にはわからなかっただろう。

胸に沸く憎悪は変わらないのに、殺意なんて抜けきつてもいないのに、恐怖がカランと消え去っていた。

きつと妹がいなかったからと言うのもあるだろうが、それに少しだけ心が軽くなった。

考えても見ればそうだ、自分は戦いたい相手ができただ。憧れが出来てしまった、それに手を届かせる為に今は必死に成らなくてはならないと、少しだけ開き直ることが出来た。

自分には出来ないことであつたとしても、自分を強いと認めてくれた人達に、頑張りましたとでもいう表現を限りなく尽くそうと。

それだけで心が浮かぶようだった。いまだ抜け出すことの出来ない嫉妬の悪意は、消すことも出来ないまま彼を迷宮にふさぎ続けるが、少しの間だけ、その事実から彼は目をそらそうと決めた。

心が弱い、彼は心が弱い、だから心臓を掴むように心を掴み、頑張れると小さく呟く。

ここじゃ終われないのだと、そして一度過去を反芻した。

終わった日を、反乱を計画したと父に滅ぼされた男爵家、根こそぎ蹂躪されたあの悪夢を、あそこで彼は全部を諦めた。

殺してやると言う言葉だけを杖にして、そうやって生きてきた心の弱い存在は、神童と言う憧れを見つけて崇拜した。

彼みたいになりたいと、そして魔剣の様になりたいと、せめてその人達に誇れるだけの自分でありたいと、それはまるで継る物を求める様なかつての彼だった。それはただ過去に戻っただけ、何一つ変わりはない。

そして妹に嫉妬を、何も変わってはいないただの拗ねた餓鬼だ。

今のままでの強さを騙れるだろう、だがよりどころを無くしてまた怯える日々が始まるだけ。このまま行けばきつと彼には何一つ残

らないだろう、決意一つ果たせず、妹の前で屈服する未来しか残っていない。

「弱いままの心はただ人を求めてさまよっているようだ。」

誰かに認めてもらいたいと、それが自体が悪い事ではないにしても、人殺しが人に認めてもらうなどと言うのは、千は殺してから語ればいい。

虐殺者として認めてもらえるだろう、万を殺せば大虐殺者、十万を越えれば暴君か独裁者か、そんなステップアップしかないと理解しているのだろうか。所詮人殺しはその程度の歩みしか出来はしない。

彼の範疇なんて所詮シリアルキラーがいいところだ。

最もその程度でいいと覚悟はしているのだろう。

だから強くなるかと考えた、この先杖を持たずに妹を殺す為に、きつとそうじゃなければ彼は同じ無様を繰り返してしまう。

目をふさいでも思い出す生涯の無様の限り、最初は妹に負けたところから、同あつても勝てないことを刻まれた時から、努力を繰り返しながら破滅して言った自分。

甲冑を着込んで妹と戦い軽々と惨敗したあの時、そして自分の手から全てが零れ落ちたことを自覚した時、一番新しいものにいたっては刷り込まれた絶望で何一つ体が動かない。

彼は人殺しにすら満足になれないのだ。

「縋ってでも、這いずってでも、それしかないか。それしかないよな」

自分に許された唯一を行使するにはそれしかない、全部自覚していた、自分が彼らに縋っている事も、崇拜している事も、だがそ

れを遣わなくては今の彼は歩くことすらままならなかったのだ。

心が弱いといったが、彼はすでに薄弱といった状態だ。なぜそうなったかなど、いまさらいう必要もないが、彼の始まりは妹で、結局終わりも妹で決着す程度の存在だ。

それだけ存在をすり減らしてまで足掻くのだから、性根の部分は強いのだろう。何しろ負けると分かっつていようと殺すと言い張るよくな奴だ。だが柱が太いからこそ余計に磨り減り心はボロボロになっっているのだろう。

何度も立ち上がることは出来るが、そのたびにそよ風でもへし折られる。

考える葦程度にはなっつてほしいものではあるが、そう簡単にそこまで頑張れるほど強くないのもまた彼なのだ。

「神童か、本当に勝ちあがってくれるか。不敗との闘いか、どうなるんだらうか」

しかもだ今から始まる戦いのことよりも先のことばかり、彼がきつと父親を視界に入れるのは、闘いの時だけなのだろう。本来なら復讐をしてもいい立場だし、彼が終わった原因の過半数はこの男にあるというのに、彼はそれすらどうでもいいと思う。

初めて武器を合わせたいと思った男、彼にとっては最強とも思える強さを誇る剣士。彼と戦えるかどうかだけ。

ある意味では彼をここまで破滅させた罰と言えば罰なのだろう。

そののよしあしはこれから繋がると思えば、全ての元凶とも言える男だが、その男が彼と妹の舞台に上がることは無い。

「生まれてきて思うのが妹と男っつて、どこまで性欲枯れてるんだらうか」

性癖だつたらどこまで変態だと軽く自嘲する。こうやって自分を軽んじるぐらいには落ち着いたのだろうが、何もかもがマイナス思考の自分に泣けてくる。

「今から頑張らないといけないから、すこし逃げ道を塞いどこう」

だが軽口がたたけるようになるぐらいには心が回復したのだろう、体に燻る熱をはっと口から吐き出し、誰に言われるでもなくただ武器を振った。

まるで周りに喧嘩でも売るように、しんとなった音は、その使い手の剣が恐るべき鋭さを持っていることをやすやすと証明して見せただろう。

それを見るだけでも腕がどれほどの物か読み切れる者もここには多い。さすがその深遠までは見通すことは出来ないだろうが、それでも片鱗ぐらいは喰らいつくだろう。

「はっははは、これでもう逃げられない、逃げられないぞ、この腐れ弱虫め」

心臓が痛いぐらいに鳴っていた。

こんな挑発まがいの事をやったのは、自分に発破を掛ける為だ。逃げられないぞと、もう縋っても縋らなくても歩き出さなくちゃどうにもならないと、頑張れないなら無理やり頑張ってもらおう。

「もう逃げられない、ここまで調子付いたんだ、逃がさないぞ卑怯者」

自分を奮い立たせるといふよりは、脅迫したのだろう。

ここで動けないようなら何も出来ないぞと、結果が成功したのかどうかは追求はしないが、彼はどうにも笑うしかなかった。

少しばかり強張って、凶相紛いの表情になっているが、それが彼の箔でもつけてくれたのか、周りも同じように笑って見せた、ここにいない妹と父、母以外は、上等だと笑ってくれた。

この時、少しは彼の世界が広がった。

だがこんな挑発紛いの行為をやっていると、いつの間にか控え室が場末の酒場のような空気ではあるが、どうせ真剣を使った殺し合いをやらかすのだ。この程度の空気なければ誰もやってられない。

暗い空気にいるよりは楽しげではあったが、それだけやると彼は武器を振って、軽く剣を体になじませる。努力教の信者の癖に珍しくあまり調整を行わなかったが、それもある意味では挑発だったのだろうか。

ただそういった恐怖を口から吐き出し、自然体になったところに、観客の声が激しく響いた。それが自分の出番だと言うことの証明だろうと、確認すると、ぼんやりと呟く。

「剣聖殺してくるか」

呼吸する様に当たり前に、自然体のまま呟いて、そこにいた全員に驚きを与える。

当たり前だ剣聖とはかつての最強、この国における軍事力の第二位、今なお残る伝説と言ってもいいような男だ。

だが彼は変わらない、軽い調整と当たり前の動作。

殺せないわけが無いと、さも当然のように言い切り、第一試合ですと呼ばれて歩き出した。誰もが瞠目する中、本当に剣聖は殺されるのだろうかと思う。

だがその時ある意味では、人間の範疇における最強が決まってしまうのではないだろうかとも思う。

ただ一人を除いて、そういつてもらわないと困ると、彼もまた控え室だ人知れず挑発紛いの剣を振った。

その時の彼女はすごく機嫌がよかったと言えるだろう。

この後の参上を考えなければの話だが、それこそ本当の意味で嫉妬によって凶相となつてゐる父を見ていないとはいへ、父と兄の闘いが楽しみじゃないわけが無い。

もしこれで兄が勝つような事があればきつと。

「また家族全員が揃うんだもん」

そうそれだけが望みの彼女は笑つてみせた。

相對する二人の剣士、だがその二人には絶望的なさが見て取れた。あの時の兄とは間違いなく違う、多分彼女が見たかつた兄。

まるで父親に愛撫されたようにそれだけで彼女の股から蜜が溢れる。あれが兄なんだと、まるで恋に浮かされた乙女のように蕩けた顔で。

「あれ、あれ、あれ」

そんな自分の反応に戸惑う、今までには無い感覚と言つて発情に彼女は驚いていた。

だつておかしいのだ、兄は明らかに今までの形を保っていない。それは開き直つたこともあるだろうが、今だけは前を向くという決意をした所為もあるだろう。

と言つよりもあれだけやつて、怯えるようであればもう妹には二度と手が届かないと確信していた。

そして試合が始まる前、二人は一度だけ視線を合わせた。

もしかするとそこで彼らは初めて父と息子として対面したのかもしれない。彼女はその光景をまるで、何か別のことが起きるような嫌な予感を感じずに入られなかった。

だがとめらる訳が無い、とめられよう筈も無い、今まで人生において全ての事が可能であった彼女だろうが、この二人は止められない。

太陽は輝く、だが全ての闇を照らせるほど万能ではない。ましてや嫉妬などと言う当たり前の感情は、彼女の行動を台無しにしてしまう。

なにより女の彼女が、出すはずだった声を押し留めてしまう。たぶん本能で気付いているのだろう、男二人が自分の為に分争っていると言つ状況を、そしてそれは太陽が翳った瞬間でもあった。

これを見た時、きっと彼は叫び語を得上げるほどに熱狂しただろう。

やはりこの世に完全なものなど無いと、最もだそれが彼女にとってまじな成長であることも理解するべきだ、人は輝かしいものよりも多少でも翳りがあるほうがより人を集めると言うことを。

ある意味では一層完ぺきになったそれに対して彼は何を思うのだろうか。

敵は一層強大になったというべきだ、だが気付かない、いまさら多少成長されたところで絶望的な差は変わりはない。

十の力で挑む男の敵は千を越えるのだ、だからこれは見せしめだと笑う。彼は父親を父と思わない、ただ殺す、これが復讐だと、心の弱い男の嫌がらせだと、自分を追い詰めなければ逃げ出すことしか出来ない男の牙であると。

そして闘いは始まった、軍神という女神の元で、だがあつけない。始まりから終わりまで三十秒、剣聖が武器を振るうべく剣を高く持ち上げた時、その全ては終わった。

「何も言うことはないんだ父上」

「駄作よ」

最後の親子の会話はこの程度の代物で、観客の悲鳴とあらゆる絶望の声が響いたのはそれから数秒後。

ただいんと音が鳴った、ノイズすら混じらぬ純朴な一振り。一体どこから音がしたのかと誰もが首をかしげる。だがその音がこの闘いにおける勝敗を決した代物だと言い張るものであった。

何が怒った変わらぬ剣を持ち上げたままの剣聖だが、思い出したように首に赤い血の線が浮かび首はごとりと地面に転がった。

「え、見えなかった、なにあれ」

軍神の目を持ってしても、彼が剣を振るった軌跡すら見えなかっただろう。早すぎる一撃と言いたいが、軍神の目で見切れぬものなど無い、ただ彼女は首をかしげた、父が死んだ事よりもそうだった事に。

魔法でもない、兄は才能はあつたかもしれないが、その能力を全て剣に転化しているはずだ。なら一体何が起きたと、ただそれは当たり前前のごとくに起きた、一瞬の顛末。

剣聖が死んだ、容易く何も出来ずに、それこそ魔剣を彼が殺したように、首を切り落とされた絶命した。

「もしかして、あれって、冗談みたいな事だと思ってたのに」

だがその技術を数人は見切ってしまう、と言うよりもそれしかない
と確信するしかなかった。

それは遙か剣の御伽噺、剣を突き詰めたものが剣を必要としない
と言つ言葉の遙か先。その中で軍神がポツリと呟いた、御伽噺とし
か思っていないかったその技術。

「軌跡再現」

その男が振るつた過去の斬線を再現する、ただそれだけの技術で
ある。

六章 ただ再現される月日の形（後書き）

うわ、自分で書いておきながらなんだけど反則というか、反則だね。

あとごめんちょっと文字数がいつもより超過したので、日をまたいでしまいました。ちょっと明日が外伝と云うか父親編混ぜるよ。

余りにもこれじゃあ報われない親父の純愛が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8515x/>

略 妹様へ

2011年11月1日00時15分発行